

インタビュー日  
2020年11月19日(木)

## 高橋典子さん

芸能プロダクション株式会社リコモーション  
代表取締役社長



芸能プロダクション株式会社リコモーション代表取締役社長であり、株式会社キューブの代表取締役副社長でもある高橋典子さんにお話をお聞きしました。

### 1. リコモーション設立、 キューブ設立まで

—— 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎で辰巳琢郎さんと演劇活動をされ、京都薬科大学入学後、学生劇団そとばこまちに入団され、女優として活動しておられたのですね。

大学卒業後も2年間、大学で助手として働く傍ら、劇団で制作に携わりました。

—— その後、リコモーションを始められたのですね。

学生劇団が注目されるようになった時期で、私や仲間に仕事の依頼が入るようになり、仕事の窓口が必要になったので、リコモーションを立ち上げました。営業のやり方を、NHKをはじめとする各局の方々に教わり、自分達でプロフィールを作ってテレビ局や映画の撮影所等に出入りするようになりました。見よう見まねで

始め、いただいた出演料の何割かを通帳にプールし、そのお金が株式会社を作れるぐらい貯まったので、2年後に、法人化しました。

—— 辰巳琢郎さんが朝ドラ「ロマンス」に、生瀬勝久さんが朝ドラ「純ちゃんの応援歌」に抜擢された頃ですね。その後、東京へ進出し、キューブを設立されるのですね。

リコモーション設立後、読売テレビで深夜番組「現代用語の基礎体力」

というコント番組に企画協力し、これを皮切りに在阪局の番組の企画制作に携わるようになりました。小劇場ブームの時期です。リコモーション所属の生瀬勝久、古田新太、羽野晶紀等が関西でブレイクし、東京からの仕事のオファーも増えました。「チコちゃんに叱られる」で有名な小松純也プロデューサー等、劇団のメンバーも学生ブレイクとして番組の企画制作に加わり、その後、東京のテレビ局に就職し、現在も業界の第一線で活躍されています。リコモーション立ち上げの頃から、所属タレントのマネージメントに留まらず、コンテンツ制作に携われたことは、大変勉強になりました。

それまで、大阪の演劇人は仕事を東京圏に移す節目では事務所や劇団をいったん離れ、東京の事務所へ移籍していましたが、私たちは自分たちの事務所のまま行こうとなり、南青山にマンションを借りて東京支社を作りました。最初はそのに寝泊まりしながら事務所兼宿舎みたいな形でやっていました。

南青山に引っ越した日に、私の中学の同級生と青山のベルコモンズの前でバツリ再会しました。当時、彼はレコードディレクターをしており、その時期に養成していた藤木直人とその双子の兄を紹介してもらいました。藤木兄弟のような逸材をマネジメントして、東京で本格的に仕事をしていきたい！と思うきっかけになりました。藤木直人の音楽活動をしっかりバックアップしたかったので、当時、羽野晶紀が契約していたポニーキャニオンの北牧裕幸に紹介し、協力を仰ぎました。北牧は現在のキューブの社長です。

—— そうすると、キューブは藤木さんの出会いから始まったんですね。

当時、リコモーションで、音楽アーティストを育てていくことには限界があるなと思っていました。「D・LIVE ROCK TO THE FUTURE」という音楽と演劇とを融合した新しい日本のロックミュージカルの公演をプロデュースさせてもらったことがあり、公演は大成功でしたが、自分の未熟さを痛感していました。音楽、映像、演劇等のエンタメを広く捉えた会社を作りたいと思い、北牧とキューブを設立しました。

—— リコモーションとキューブを提携させる形にしたのですね。

大阪にも沢山の役者と、HEP HALL等の劇場があるので、リコモーションの存在は残しつつ提携する業態を作りました。今では、スタッフ・キャストとも、気持ちは1つの会社として活動しています。

—— 「いきものがかり」もキューブ所属でしたね。

いきものがかりは、彼らが学生の頃に弊社音楽スタッフの目にとまり、キューブ所属となり、3年間の準備養成期間を経て、デビューしました。昨年結成20周年を迎えるまで16年間所属しており、現在は業務提携をしています。

藤木直人、生瀬勝久や古田新太も、学生の頃から弊社に所属しています。生瀬が一番古くて、34年目でしょうか。また、昨今ではケラリーノ・サンドロヴィッチや、いとうせいこうなどのクリエイター、島田昌典ら音楽プロデューサーも集まる多彩な事務所になっています。一緒に「ものづくり」をしたいメンバーが集まり、思いを叶える事務所であり続けたいと思っています。

## 2. コロナ禍の影響

—— 新型コロナウイルス感染症の影響はいかがでしたか。

とても辛いものがあります。我々は、2月26日に政府のイベント自粛要請が出てから約半年、舞台、コンサートのほぼ全てを中止しました。「いきものがかり」の結成20周年記念の大規模な全国ツアーも全て中止となりました。

皆様、状況は同じで、「このままでは、日本のエンターテインメントは死んでしまう」と言っても過言でない状況が続いています。

そんな中、野田秀樹さんをはじめとする演劇界を牽引する方々の声かけで「緊急事態舞台芸術ネットワーク」が設立されました。222団体が所属しています(2020年12月1日現在)。それまでも、あらゆる舞台芸術のジャンルでそれぞれ団体はありましたが、この規模の一本化は初めてです。「緊急事態舞台芸術ネットワーク」は、現状の精査、公演のガイドラインの作成、多種多様な助成や給付金についての個人へのレクチャー、政府に対する助言・陳情等の膨大な活動を行っています。演劇人だけでなく、ご理解ある弁護士の先生にも多大なご協力をいただき、このネットワークが成り立っています。

今年、舞台芸術とそれに携わる人々を救うための色々な助成、給付金の予算がついたことは、とても有難かったです。我々含め、それによって存続に希望が持てるようになった団体個人は数知れないことと思います。ただ、感染拡大の状況が予断を許さない今、来年の動向には、大



さい不安とともに、日々を過ごしていることも事実です。

あらゆる国民が全て緊急事態である中、我々は工夫し、頑張るのみです。

こんな時こそ、心を満たすエンターテインメントは絶対必要です。その1つの考えに舞台人が一丸となって向かえているということは心強いことです。

—— 皆でエンターテインメントを守ろうとされているんですね。

先日も、黒沢明監督の「生きる」という映画を原作とするミュージカルが上演されました。この舞台は、世界に発信することも視野に入れた作品です。ニューヨークのブロードウェイも来年前半までクローズが決まり、ロンドンのウエストエンドも6割の劇場がなくなるかもしれないとも言われています。世界中が壊滅的な状況の中、日本は公演が再開されており、海外の演劇界では「日本の奇跡」とも言われているそうです。海外の劇場が再開した折に、いち早く日本発のオリジナル作品を海外で観ることが出来れば。そんな思いを込めて私は大きな拍手を送りました。同じ気持ちであろう満場の拍手がゾクゾクするほど感動的でした。この感情の高ぶりも6か月ぶりでした。負けてはいられない。そんな力をこの舞台からいただきました。

—— テレビや映画に出演されている方々も影響を受けられましたか。

感染防止のガイドラインに基づき、最大の注意を払って現場は動いています。パーテーションを置いてフェイスシールド付きでリハをやり、本番の時に取って撮影したり、本番もパーテーションを置いたまま撮影し、

映像処理で全部消したりすることもあります。通常の撮影の何倍も時間がかかっています。また、感染ならずとも、発熱者が出たことによる念のための撮影中止、スケジュール組み替えはしょっちゅうです。

弊社では「楽屋に入る人は最小に、そして検査必須」というルールにしているので、自分の事務所の役者が出演する舞台を見に行った時も一切面会はしていません。撮影の現場にも立ち入っておりません。感想を述べ、激励するのが私の仕事であったわけですが、なんとも寂しいものです。その代わり、LINEなどで感想を伝えています。

役者やアーティストに、昨今悲しい事柄が起きているので、役者スタッフのメンタルケアには細心の注意を払っています。むしろSNSを通じて親密に話が聞ける関係になった人もおります。何事も前向きに捉えていくことが大切だと痛感しています。

### 3. 長岡米百俵フェス

—— 10月の「長岡米百俵フェス(米フェス)」のニュースを拝見しました。

今年はあらゆる音楽フェスが中止になったので、10月に行われた「長

岡米百俵フェス」は、今年2月の自粛要請後、おそらく最初に開催された大型音楽フェスかと思います。

フジテレビの「ワイドナショー」で、フェスの様子を準備から終了後まで特集していただきました。放送を見ていただいております。

—— 主催者、出演者、お客さんの距離が縮まって一体感が生まれている感じがしました。

来てくださったアーティストへの感謝はもとより、消毒したり会場を作ったりしているスタッフに、皆さんが「本当にありがとう」と言ってくださっている様子とか、ひと夏、花火を上げることができなかった職人の方の想いとか、そんなエピソード満載の特集でした。特集を見られた大竹しのぶさんをはじめ多くの方からエールをいただきました。

—— 当日の様子を教えてください。

フェスの会場はかつてスキー場のあった大きな丘でした。1万人以上入れる会場でしたが、集客を1日5,000人以内に、また、新潟県民に限ると制限しました。

客席の前の方の足元には、前日にスタッフが1枚1枚貼った立ち位置を示すシールがあり、そこに立って手







を叩くのと飛ぶのだけ。後ろの方のお山では家族毎に隣の家族と2メートル離れて芝生に座り楽しんでもらいました。ディスタンスを取るため、会場を一方通行にしたので、直線距離100メートルの所に行くにも山を遠回りしないといけないことになりました。それでも誰からも文句は出ませんでした。

さだまさしさんは「僕はフェスに出ても皆をしーんとさせるのが一番上手だ。」なんてみんなを笑わせ、「皆、心の中で歌いましょう。」と呼びかけ、「北の国から～螢のテーマ」を歌われました。全員、その場で大きく手を挙げ、心の中で一緒に歌いました。ちょうど、夕陽が落ちる時間帯で、それは素晴らしい情景でした。

—— 一緒に声を出して歌ってもいけないんですね。

今大人気の「Creepy Nuts」も出演していただきました。本来のライブでは大きな声で、グルーブ感一杯で騒ぎ楽しむのですが、今回、お客さんは空間を空けて立ち、声を出さず、その場で手を叩いたり、腕を振ったり、上下に飛んだりして、ラップを楽しみました。経験したことのない多幸感が会場を包みこみました。ご本人達からも「独特な環境で、それでも観客を前にしたライブは半年ぶりで最高だ！」というお言葉をいただきました。

約束を守り、お互いに感謝し、会場全員が、安全なフェスを楽しもうとする気持ちが一体となって、拍手





で盛り上げる素晴らしいフェスになったと思います。

すでに来年の開催に向けて、新潟県内外のお客さんや、アーティストからの熱い期待の声が届いております。必ず、実現させたいですね。アフターコロナの世の中になっていればより嬉しいと思うのですが。

## 4. オンライン無観客ライブ

—— オンラインイベントも開催されていますね。

今の状況で出来ることを、皆が工夫することはすごく素敵だなと思います。

—— 「wacci(ワッチ)」のオンライン無観客ライブを拝見しました。舞台を飛び出して観客席と思われるところに立って一緒にタオルを振ったり、オンラインでも楽しくて気分が上がりました。私は子育て中なので実際のライブに行けません。オンラインだと気軽に見られるので嬉しかったです。オンラインライブに新しい可能性を感じました。

wacciは「ひとりひとりの日常に寄り添う」をモットーにしている10年目のグループです。「別の人の彼女になったよ」の楽曲はロングセラーのヒットになっています。

一昨年は、全県ツアーで47都道府県を回りました。今年も全県津々浦々の皆様に届けようと2度目の全県ツアーを計画していたのがほぼ全部中止になりました。それでも、今、やれることはなんだろうということになり、武道館で無観客配信ライブを行いました。

満場の観客を想像し、来年は武道館で有観客で出来ればいいなという

思いを込めました。大会場の中央にステージを配し、シンプルに音楽を届ける方向性で演出を考えました。

カメラを3階のてっぺんとか2階の前列とか色んな所に置いて、そこからの視点で皆さんに配信しました。会場に自分がいたらこんなふうにwacciが見えるんだと想像できるような、そういう楽しみ方ができる演出でした。若手の役者達も、ノンストップのミュージカル調の演出に協力しました。

wacciはこれから来年の夏にかけて、全県ツアーを再び行います。会場は、キャパ50パーセント。密を避け、声を出さず、マスクをして参加のこと。それでも、今出来ること、皆の心に寄り添えることが大事と考え、万全の感染対策で全県を巡ります。ぜひお近くでwacciを体験いただければと思います。

## 5. 弁護士に対して

—— 社長のようなお立場から、弁護士のこういうところを注意して見るとか、こういう弁護士が信頼できるとか、弁護士もこうすればもっと視野を広げられるといったアドバイスがあれば伺いたいと思います。

アドバイスなどと、おこがましく

て申し上げにくいですが、弁護士の先生には日々色々とお世話になっております。昨今は、SNSの発達や、働き方改革など、かつて無かった多様な問題も起こり、どこまでを弁護士の先生にご相談すべきか悩むことも多いです。私たちは「こんなことぐらいいいのでご相談申し上げてもいいのかしら。」と思いがちです。アーティストもそうです。そんな時に「何でも聞いて。」とフランクに言っていただけることがとてもありがたいし、支えになっています。また、1案件だけじゃなくて、今までの相談履歴を先生に持ってもらって、長いタームでお世話になりたいと思っています。昨今は、この業界にもご理解ある先生方が増え、とても心強いです。

—— 本日は、貴重なお話をありがとうございました。力をいただきました。

新しい年を迎えてもまだまだ大変な時期が続きますが、細心の注意を払って安心安全な環境を作り、粛々と作品を作っていきたいと思っています。

（インタビュー：飯島 奈 絵  
江口 陽 三  
小 山 藍）

